

農耕民族的発想と狩猟民族的発想

2021年4月1日

1 / 3

私は小学生時代(1950年代)を毎年河川氾濫(川内川)で床上浸水が起こる鹿児島県川内市で育ち、中学、高校時代を桜島の火山灰が降り注ぐ鹿児島市で過ごした。その当時南九州は台風の直撃を受けることが多く、かつ降雨に極端に弱い「シラス地盤」地帯であるため、毎年土砂災害が発生し多くの犠牲者が出ていた。これは仕方がないものと思っていた。

1964年川内川上流に「鶴田ダム(九州で最大規模)」が完成後、川内川の氾濫はほぼなくなっている。

日本人は自然災害に遭遇してもこれは天災だと受け入れて、その土地から離れず生きていく様を見て生きてきた。このように自然に順応しその猛威も受容しながら生きるのは、「農耕民族」たる日本人の天性で、戦後の復興をやり遂げた源であったとも思っている。

若い時、カリフォルニア大学 Davis 校に1年間留学した際、知り合った友人達の考え・発想か自分と違うと思わされることが度々あった。Davis の住人たちの多くは世界各地からこの地に移住し、永住する覚悟の人々で、墓はこの地に建てるとの生き方を知り、彼らは「狩猟民族的」なんだろうと感じさせられた記憶がある。

人種と民族は違う

「人種」は生物学・遺伝学的な特徴によって分けられているのに対し、「民族」は言語、文化、慣習などの社会的特徴により分けられている。人種は概念的にコーカソイド(ヨーロッパ人、インド人、イラン人、アラブ人、北アフリカ人)、モンゴロイド(中国人、日本人、韓国人、東南アジア人)、ネグロイド(サハラ砂漠以南のアフリカ人)、オーストラロイド(アボリジニ、ニューギニア人)の4大人種に分類するのが一般的と言われているが、DNA 染色体で物理的に区別できるわけではないらしい。

人種が遺伝学・生物学的な特徴による分類であるのに対し、「民族」とは言語、文化、慣習などの社会的な特徴による分類である。民族が使用する言語にも違いが生まれ、また数千年にわたる混血を繰り返して現代に至り、今日では国家が形成され、国民という概念で秩序が保たれている。

タイトルにした「農耕民族」、「狩猟民族」は食料調達方法によって使われた言葉であり、生物学的な定義ではない。世界はこの数年、激動・転換期に対峙しているが、各国指導者の思考・行動・生存パターンは先祖の生活習慣の影響を受けているのだろうと感じる発言・行動・政策が際立っている。

狩猟活動から農耕活動に

もともと人類は魚肉や木の実などを採取し原始的な狩猟をしながら十分に生き伸びられたはずである。その後、穀物等を育てる農耕活動により安定した生活を維持できるようになり、天文学や農耕技術の知恵を身に付け、集団的な生活をするようになったと考えられている。

日本人は「農耕民族」的要素が卓越しているといわれているが、縄文時代は当然狩猟採取活動を行っていたし、本格的に稲作農耕を始めたのは弥生時代(BC300-AC300)である。稲作を主にした農業の発達により、飢えから解放され、大量の文明の道具作り出し、生活が豊かになり、農耕社会が生まれ、これらの集団が定着しさらに大きな集団になって国のもとになった。

農耕民族的発想と狩猟民族的発想

2021年4月1日

2 / 3

ゲルマン人の一派であるアングロサクソン人、ノルマン人は広大な地域を移動しながら生活することを強いられた長い時代を経て国を形成していった歴史がある。アメリカ大陸に入植した白人たちも、もともと農耕牧畜文化圏の人間であった。

しかし、国土の狭い島に住む日本人からみれば、広大な地域を移動・活動・定着する人間は狩猟民族的に映ったのかもしれない。

このような歴史から、日本人は「農耕民族」で、欧米人は「狩猟民族」との観念が生まれたのではないだろうか。しかし、地域によって分類されるわけではなく、人間には狩猟民族型発想と農耕民族型発想をするタイプがいると知ることも大切である。

農耕民族は同じ場所に根付き、大人数で集団農耕生活をする必要があったため、自然と共存し、計画性・慎重さが重要と考え、集団の中で規則を守りながら画一的な生活を送るようになったのだろう。

狩猟民族は、狩りで食料を得て、獲物が得られなければ飢えるという不安定な生活を送り、少数の部族で暮らしていた。このような生活スタイルを強いられると、個人主義的で、自分を主張する傾向が強くなり、したがって、行動力は優れているが計画性に乏しい一面が強いようである。

これらのDNAを受け継いでいるのか、日本人は和を尊び、他人との対話で「曖昧」にする傾向にあるのに対し、欧米人は自分の意見をはっきり述べるタイプが多い。

私は、「農耕民族的人間」と「狩猟民族的人間」の優劣を述べるつもりは全くなく、両者の利点をそれぞれ認め合いながら生きて行くべきと常日頃から主張してきた。次世代を担う若者にも、組織を運営・改革する時にも、よく「農耕民族的に落ち着いて判断せよ」、そして「狩猟民族的に迅速に行動せよ」と言ってきた。

これからは狩猟民族的発想も

農耕民族的な考え方では、先頭を追いかけることはできても、大胆なイノベーション・改革を起こすことはまずできないと思っている。しかし、21世紀はイノベーションなくして国は衰退し、国内的には地方が衰退する時代に突入した。今は高度成長期の生産活動ではなく、新たな個人の知識・知能あるいはAI等を使った技術によりイノベートする時代であり、まさに「狩猟民族的」発想で対応しなければ生き残れない。

昨年からのコロナ禍で、日本人が抱いていた自信は脆くも崩れた。行政、企業、組織の縦割りの弊害、デジタル化の遅れ、時代の変化に対応する法律改定の遅れなど、農耕民族の持つ「変革への抵抗・恐怖」に由来しているのであろう。

国民が長年慣れ親しんできたシステムを変革するには、今は「明治維新」、「終戦」以来の転換期でありとの自覚・認識を国民が共有し、民主的な政治家、経営者、有識者がリーダーシップを発揮する時である。合わせてマスコミの啓発姿勢にかかっている。

しかし、狩猟民族的な考えでは、長期的な視点の欠如の弊害が必ず生まれることも認識しておくべきでもある。

農耕民族的発想と狩猟民族的発想

2021年4月1日

3 / 3

インフラの整備と地方創生は「農耕民族的発想」で

戦後の日本の復興、社会インフラの整備は「狩猟民族的」に推し進めてきたともいえる。特に高度成長期時代の建設業は大きなプロジェクトが終われば次のプロジェクトに移動するやり方で、まさに「狩猟民族的」で画期的であった。今や戦後復興、高度成長の結果、東京一極集中になってしまったことをいかに修正するかが大きな課題として投げかけられている。

現在「地方創生」と叫ばれているが、その地に根差し、人との繋がりを大切にする農耕民族的発想がなければ「地方創生」は成し遂げられない。加えて、東京のインフラ整備でなく、国土にゆきわたる基幹インフラを次世代のために残すべきである。

日本がこれからも国際競争力を維持するには、これまで整備してきた社会インフラを「農耕民族的」手法で維持・補修し続けなければならない。つまり、限られた予算で毎年コツコツと計画性をもってインフラの維持・補修を進めながら、インフラ機能向上のための新たな整備構築に投資する必要がある。

アメリカ合衆国が30年前今日以上に経済が疲弊していた頃、安い製品が外国から流入するためであると理由付けしていたが、当時アメリカのインフラが荒廃していたのが大きな原因でもあった。このような事実を知っていながら、日本では社会インフラは既成していると政治家は思いこみ、マスコミも公共事業不要との報道を続け、国土の強靭化が欧米諸国に比べ遅れをとっている事実を伝えていない。

マスコミは目先の状況の報道に偏ることなく、長期的かつ国際競争力向上の視点に立って世界の実情を国民に知らしめる役目を果たして貰いたいと切に望む今日この頃である。

村田 秀一